

長崎・五島のサウンドスケープ

藤沢 望, 山口さなえ

Soundscapes of Goto Islands and Nagasaki City, Nagasaki, Japan

Nozomu FUJISAWA and Sanae YAMAGUCHI

概要

九州最西端に位置する五島列島は、大小百有余の島々から構成され、豊かな自然と特色のある文化・歴史を有する地域である。本論文では“環境と人との関わりを中心として音を捉える”サウンドスケープという概念に注目し、五島におけるサウンドスケープ（音の風景）がどのような特色を持ち、五島の自然・文化・環境や五島に住む人々の生活とどのような関わりを持つのかを考察した。五島各地でのフィールドワーク調査の結果、福江のチャンココや奈良尾神社のアコウ樹のざわめきなど、五島特有のサウンドスケープといえるものを見つけることができた。一方で、地域住民へのインタビュー調査の結果からは、住民の音に対する意識・関心はあまり高くないことが明らかになった。

キーワード：サウンドスケープ, 長崎, 五島, チャンココ, フィールドワーク, 環境音

1. はじめに

本論文で扱う“サウンドスケープ”とは、「sound(音)と-scape(～の眺め/名詞語尾)の複合語で、視覚的な景観(landscape)に対して、音の風景、聴覚的景観を意味する[1]」言葉である。これはカナダの作曲家であるマリー・シェーファーによって提唱された“環境と人との関わりを中心として音を捉える”という概念である[2]。サウンドスケープの概念は、近年日本でも広く知られるようになり、学問分野のみにとどまらず環境デザインや芸術・文化活動などにも取り入れられてきた。長崎においても、1992年に長崎伝習所/長崎・サウンドデザイン塾による「ながさき・いい音の名所10選」が企画された。これは長崎市内の音名所を市民から募ることで、それによって身の周りの環境に意識を向け、

自分たちの住む街をより深く知ってもらうことを目的としている。最終的には20カ所が選定され、「ながさきの風景・音と耳と心/92市民推薦『ながさき・いい音の風景20選』[3]」として、各所の写真や地図、推薦者からのコメントが掲載されたパンフレットが作成されている。また、1996年には『残したい日本の音風景100選』という事業が環境庁によって行われ、長崎からは「山王神社被爆の楠の木」が選ばれた[1]。

一方、九州最西端に位置する五島列島は、福江島・久賀島・奈留島・若松島・中通島を中心に、大小百有余の島々から構成されている。ほぼ全域が西海国立公園に指定されており、変化に富んだ海岸線や種々の動植物、豊かな自然が作り出す名勝(福江の大ツバキや檜の浦のアコウなどの天然記念物)などがある一方で、捕鯨関連の文化遺産・教会群など

の有形文化財・念仏踊りなどの無形文化財・遣唐使や和寇と関連のある史跡など、特色のある文化財を多数有している〔4〕。これらの自然環境や文化財はきわめて優れた観光資源でもあり、五島では「つばき」などの名産品を生かした地場産業や教会群などのキリシタン文化・歴史遺産を中心とした観光産業の発展に力を入れている〔5〕。平成19年1月には「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」がユネスコの世界遺産暫定リストに追加掲載され、世界遺産の本登録を目指す取り組みが進められている。

このように五島は豊かな自然と特色のある文化・歴史を有する地域であるが、サウンドスケープという観点から五島の音環境を捉えた調査・研究はこれまで行われていない。また、観光資源として取り上げられる五島の自然や文化はそのビジュアル面に注目したものが多く、音という側面における魅力が語られるようなものはほとんど見あたらない。周囲を海に囲まれ、鉄道のような大型公共交通機関を持たない五島では、長崎市などに比べて静かな環境にあるだろうし、五島特有の文化や生活環境が他では聞くことのできないサウンドスケープを作り出すことは容易に想像できる。

そこで本論文では、五島におけるサウンドスケープについてフィールドワーク調査を行い、それがどのような特色を持つものであるかを明らかにし、五島の自然環境や文化およびそこに住む人々と音の関わりについて考察していく。また、「ながさき・いい音の風景20選」で選ばれた長崎市のサウンドスケープについてもフィールドワーク調査を行い、五島と長崎市のサウンドスケープを比較しながらそれぞれの特徴を明らかにする。

2. フィールドワーク調査

2-1. 五島のサウンドスケープ調査

2008年8月11日～14日および9月15日～18日に、新上五島町（中通島、若松島）および

五島市（福江島）にてフィールドワーク調査を行った。ここでは、五島のサウンドスケープの特徴を明らかにするために、主な観光地や施設、イベント、伝統行事などが行われている場所などに赴き、環境音の収録・映像撮影と住民へのインタビューを実施した。

8月の調査では、現地の状況把握と五島固有の音名所となりうるような特徴的なサウンドスケープを探るためのフィールドワークとして、各地の環境音の録音および映像撮影、特に五島市福江町で行われた念仏踊り（チャンココ）の取材を中心に行った。環境音の録音・映像撮影には「SONY PCM-D50（音声録音用）」および「SONY DCR-SR65（映像収録用）」を使用した。

9月の調査では、再度環境音の収録を行いながら、フィールドワーク中に出会った人々に対し半構造化面接によるインタビューを行い、その地域における象徴的な音やよく聞かれる音、聞こえてくる音の変遷、音に対する意識などを質問した。主な質問項目を表1に示す。様々な会話の中でこれらの質問を行うため、それに対する回答は自由回答として得られることになる。回答者は、各地域で出会った五島在住の住民（男性9名、女性14名）および京都から来た観光客（男性1名）の計24名であった。回答者の年齢は10代後半から80代までであり特に高齢者が大半を占めたが、これはインタビュー調査を行ったのが平日の日中だったためであると考えられる。

表1 インタビュー調査における主な質問項目

No.	質問内容
1	この地域の象徴的な音は何か。地域ならではの音はあるか。
2	変わった・増えた・減った・無くなったと思われる音はあるか。
3	身のまわりにある音で、心地よい、懐かしい音はあるか。
4	音に対して普段から意識することはあるか。

2-2. 長崎市のサウンドスケープ調査

2009年2月28日～3月5日にかけて、長崎市の各所にてフィールドワーク調査を行った。ここでは、「ながさき・いい音の風景20

選」で選出された音名所のうち、前述の期間において調査可能だったものについて環境音の収録および映像撮影を行った。調査に使用した機材は、五島のサウンドスケープ調査で用いたものと同じである。なお、長崎市のサウンドスケープ調査においては、住民へのインタビューは実施していない。

3．調査結果

3 - 1．五島各所のサウンドスケープ

フィールドワーク調査では、五島の各地域をまわってそれぞれのサウンドスケープの特徴が明らかになったが、ここでは他地域には無い五島特有の音と考えられるものや地域の生活環境に関わりの深いサウンドスケープとして、チャンココ、ドンドン淵、奈良尾神社のアコウ樹について述べる。

① チャンココ

チャンココ（治安孝行）とは、8月のお盆期間中に五島市福江で行われる「念仏踊り」で、初盆のお墓や各家々、福江のアーケードの商店などを回り、霊を供養する伝統行事である（図1）。高く鳴り響く鉦の音と太鼓の音、歌唱、帷子に腰蓑をつけた衣装や踊りが特徴的である。福江のチャンココは「オモオモンデー」「サーサーエ、サーエ」と繰り返して歌い、鉦の音と太鼓の音に合わせて踊るものであるが、上大津・下大津・上崎山・下崎山の4つの地区があって、それぞれの地区で太鼓の材質（木やアルミのようなもの）やたたき方（リズム）に違いがあり、衣装や踊り方にも様々な違いが見られる。チャンココは、地区の青年団を中心として若者に受け継がれている五島のお盆の一大風物詩である〔6〕調査時には、各地区のチャンココが初盆の家やお墓をまわった後に福江商店街に移動し、数メートルの間隔でそれぞれの踊りを披露している様子が見られた。この時期は、お盆で帰省している人たちが買い物に出てくることもあり、商店街はかなりの賑わい

を見せる。

また、今回は調査できなかったが、五島には福江地区のチャンココ以外にも玉之浦のオネオンデ、嵯峨ノ島のオーモンデーなどの念仏踊りがあり、衣装や鉦のたたき方、踊り方などがそれぞれ異なっている。



図1 福江地区のチャンココ（宋念寺にて）

② ドンドン淵

ドンドン淵とは、五島市岐宿の権現岳の麓にある滝の名称で、静かな山間に滝の音が響いている。五島で最も大きな滝で、水が勢いよく流れ落ち、岩にあたって太鼓のように“ドンドン”という音がすることからこの名称がついたと言われている〔6〕岐宿河務地区から国道をはずれて山道の途中まで車で入り道の脇を徒歩で下っていくと、しばらくは水の音は聞こえず、虫や鳥の声と木々のざわめきだけが聞こえる。さらに奥に進むと、やがて水の流れる音が聞こえ始め、木々がとぎれて少し開けた場所に滝が現れる（図2）。調査時は夏だったため水量はあまりなかったが、それでもにぎやかな水流の音には“ドンドン”という特徴的な低音が響いていた。



図2 岐宿のドンドン淵

③ 奈良尾神社のアコウ樹

新上五島町の奈良尾地区は、慶長年間頃に紀州広浦（現在の和歌山県広川町）の漁師が漁業基地として移り栄えた町で、その漁民が紀州七社権現の分霊を祀ったのが奈良尾神社の始まりとされている。神社の参道には、1961年に国指定天然記念物となった樹齢650年を超えるアコウの巨木が、まるで天然の鳥居のようにまたがっている〔7〕(図3)。

調査時の奈良尾地区は平日の昼間で車の通りも少なく、主に聞こえてくるのは鳥の声と蝉の声であった。ときおり風がふくとアコウ樹の木の葉がこすれあい、さらさらと心地の良い音をたてていた。参道のアコウ樹を抜けるときにははげしく鳴いていた蝉の声も一瞬小さくなり、周辺の町と神社を隔てるトンネルのようになっている。神社の境内に入ると周辺の町の音はアコウ樹で遮られ、時折通るバイクや自動車のエンジン音が遠くに聞こえてくる。



図3 奈良尾神社のアコウ樹

3 - 2 . 五島でのインタビュー調査の結果

五島各所で行ったインタビュー調査について、表1の質問に対して回答者が挙げた音を抜き出して「身近な音・地域の特徴的な音」「あまり聞こえなくなった音」の2つに分類し、さらに音の種類別に「自然の音」「産業・生活に関わる音」などの各カテゴリーに分類した。分類結果を表2に示す。特定の音については、その回答が得られた地域名を表中に示している。

表2 インタビュー調査で得られた回答の分類結果

分類	種類	音	地域
身近な音 地域の特徴的な音	自然	波の音 虫の声 小鳥のさえずり カラスの声 海鳥	有川
	産業・生活	漁船(伝馬船)の音 車の音 フェリー(船)の音 役場のチャイム 教会の鐘 お寺の鐘	
あまり聞こえなくなった音	伝統	チャンココの音	福江
	産業	漁船が出港する音 漁船の汽笛	奈良尾

3 - 3 . 「ながさき・いい音の風景20選」にみられる長崎市のサウンドスケープ

長崎市各所で行ったフィールドワーク調査の結果から、いくつかを抜粋してそのサウンドスケープの特徴を述べる。

① おおきなくすの木のある境内の音<山王神社> 坂本町

浦上駅から浦上街道と山王通りを渡って、少し住宅街に入っていくた所にある山王神社の境内の音である。境内には、原爆で被爆した大きな2本のくすの木があり、風にそよぐ木の葉のざわめきが聞こえてくる。この場所は、大きな道路から住宅街を挟んだ奥まった場所にあるため、自動車の騒音は日中でも比較的聞こえにくい。

② 行き交う船の出入りと鐘の音<神の島(聖母の巖・どんく岩)> 神の島町

③ フェリーの汽笛の音<大波止ターミナル前, 汽船発着所> 元船町

これらは、いずれも長崎港周辺で聞こえてくる船の音である。長崎港からは五島へのフェリーとジェットfoilが就航しており、五島の奈良尾港や福江港でもほぼ同じ音が聞こえてくるが、人々がそれらに抱く印象や音の持つ意味合いは、地域によって大きく異なるものと考えられる。

④ 街の中に残された滝の音<鳴滝町，川の合流点> 鳴滝町

この音が聞こえる場所は，街の中を縫って流れる川（一部暗渠になっている所もある）の合流地点で，昔はこの場所が滝の名所であったという。現在は，比較的大きな道路が近くを通っており，水流の音はかなり大きいにもかかわらず，近くに寄るまで気づきにくい状況となっている。

4．考察

4 - 1．音名所となりうる五島のサウンドスケープ

「ながさき・いい音の風景20選」で選ばれた音名所は，街の喧噪や騒音から少し離れた場所にある自然や水に関わる音が多い。これは，自動車や路面電車などの交通騒音に日々囲まれている中で，ひとときの静けさや憩いを求める人々の気持ちが表れたものだと考えられる。一方，五島では少し郊外に出れば手つかずの自然が残っており，木々のざわめきや海の音などはいくらでも聞くことができる。逆に言えば，五島でこれらの音を音名所として扱おうとすると，当たり前すぎて面白みに欠けることになるのかも知れない。五島においては，福江のチャンココや奈良尾神社のアコウ樹，フェリー乗り場での汽笛の音など，五島特有の文化・歴史や人々の生活を感じさせるようなものが音名所としてふさわしいものだと思われる。

4 - 2．サウンドスケープにおける音の意味付け・価値付け

長崎市坂本町・山王神社の「おおきなくすの木のある境内の音」は，環境庁の『残したい日本の音風景100選』にも「山王神社被爆の楠の木」として選出されている。一方，上五島町奈良尾地区の「奈良尾神社のアコウ樹」も，地域の歴史とあいまって独特のサウンドスケープを形成していると考えられる。これらの音自体は，木々が風にふかれてざわ

めくといったもので特に珍しいものではないが，人々との関わりの中で音の存在価値を見いだそうとするサウンドスケープの概念においては，その木がたどった歴史や地域との結びつきによってさらに価値付けられたものとなる。山王神社の境内にあるくすの木は，原爆の被害を受けたり，台風によって大きな枝を折られてしまうということがありながら現在も生き続けており，そのざわめきは，境内で行われる行事の賑わいや子供たちの遊ぶ声とともに地域の人々に聞かれ続けているサウンドスケープである。このように，その場所が持つ歴史的・文化的背景，地域の人々の記憶や意識，その場所の風景などが音と結びつくことによって，特色のあるサウンドスケープとして意味を持つようになるのではないかと考えられる。

4 - 3．「音」に対する地域の人々の意識について

表2に示されているように，五島でのインタビュー調査で回答者が述べた音には，海（波）の音，フェリーの汽笛，漁船の汽笛，船が港を出入りする音など，海に関するものが圧倒的に多かった。五島は四方を海に囲まれた離島であり，昔から漁業が盛んな地域である。そのような地域の特性から，海に関する音は五島に暮らす人々にとって馴染み深いものであると考えられる。一方，「あまり聞こえなくなった音」にも「漁船の音」が挙げられているが，これは奈良尾地区で行ったインタビューで得られた回答である。昭和20年代に最盛期だった漁業も時代を経るにつれて漁業不況などにより漁船の数が減少し，これらの音が少なくなっていったのであろう。同地区でのインタビューでは「寂しくなった」「静かになった」という意見が多く聞かれたが，これは過疎化や漁業の衰退による人口減少の影響によるものだと考えられる。

なお，今回のインタビュー調査では全体的な傾向として「(特徴的な)音はない」という回答をした人が多く，「普段，音について

意識している事がなく、言われて初めて意識した」という意見も多かった。インタビュー調査では騒音等の問題があるかについても質問してみたが、「五島では騒音問題のようなものはめったに起こらないので、普段は音について意識することがない」との意見もあった。このように、フィールドワーク調査においてはチャンココやドンドン淵といった五島特有の文化や自然環境に基づくサウンドスケープを見つけることができたが、一方で、音に対する住民の意識はあまり高くないことが明らかになった。今後、五島のサウンドスケープを観光資源として位置づけようとするのであれば、地域住民の音に対する関心や意識、地域の特性や歴史と音の関わりなどについての知識を深めていくことが必要となるだろう。そのためには、「ながさき・いい音の風景20選」や「残したい日本の音風景100選」のような、地域住民が積極的に関わることのできる啓蒙活動を行うことが有効だと思われる。

5. まとめ

本論文では、五島におけるサウンドスケープの特徴を明らかにするために、フィールドワーク調査とインタビュー調査を行い、五島の文化や歴史、人々の生活と音との関わりについて考察した。また、「ながさき・いい音の風景20選」で選ばれた長崎市のサウンドスケープについてもフィールドワーク調査を行い、五島と長崎市のサウンドスケープを比較しながらそれぞれの特徴を明らかにした。

五島でのフィールドワーク調査では、福江のチャンココや岐宿のドンドン淵、奈良尾神社のアコウ樹など、五島特有のサウンドスケープといえるものをいくつか見つけることができたが、一方で、地域住民の音に対する意識・関心はあまり高くないことがインタビュー調査により明らかになった。

五島には、数多くの史跡・名勝といった有形文化財、念仏踊りなどの無形文化財、天然記念物など、観光資源として非常に魅力のあ

るものが存在している。それらの歴史的・文化的背景や地域の自然環境と音との関係、さらには人々の記憶や意識と音が関連づけられることによって、五島特有のサウンドスケープといえるものを見いだしていくことができるだろう。また、それらの音を「資源」として捉えることで、特色ある五島の文化・歴史・環境を再発見するきっかけを提供できるものと思われる。

謝辞

チャンココやドンドン淵の調査に、多忙な時間を割いてご協力いただいた五島市企画課広報係長(当時)の山下登氏に深く感謝の意を表します。

参考文献

- [1] 岩宮眞一郎,「第4章サウンドスケープ・デザイン - 風景の音づくり - 」,『音のデザイン - 感性に訴える音をつくる』,九州大学出版会, 2007 .
- [2] シェーファー R.M., 鳥越けい子訳,『世界の調律 - サウンドスケープとはなにか』, 平凡社, 1986 .
- [3] 長崎伝習所長崎・サウンドデザイン塾,『ながさきの風景・音と耳と心 ' 92市民推薦「ながさき・いい音の風景20選」パンフレット』,「ながさき・いい音の風景20選」選定実行委員会, 1993 .
- [4] 長崎県五島地方局,『五島要覧』, 2008年度版 .
- [5] 内閣府地域再生本部・第10回認定(前半)地域再生計画,“長崎県,五島市,新上五島町,『つばき輝く世界遺産の島』へ向けた基盤づくりによる雇用機会の増大”, 2008年6月25日 .
- [6] 長崎県五島市,『西海公立公園五島市ガイドブック』, 2008 .
- [7] 永治克行,『知っておきたいちょっと変わった五島雑学事典』, ゆるり書房 2006 .